

戦略的創造研究推進事業

(社会技術研究開発)

平成30年度研究開発実施報告書

「持続可能な多世代共創社会のデザイン」
研究開発領域

研究開発プロジェクト
「空き家活用によるまちなか医療の展開と
まちなみ景観の保全」

研究代表者 後藤 春彦
(早稲田大学大学院創造理工学研究科 教授)

目次

1. 研究開発の実施内容	2
1 - 1. プロジェクトの達成目標.....	2
1 - 2. ロジックモデル.....	1
1 - 3. 実施方法・内容.....	1
1 - 4. 研究開発結果・成果.....	5
2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況	8
3. 研究開発実施体制.....	9
4. 研究開発実施者	9
5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など	15
5 - 1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など	15
5 - 2. 論文発表.....	17
5 - 3. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）	17
5 - 4. 新聞／TV報道・投稿、受賞等.....	18
5 - 5. 知財出願.....	18

1. 研究開発の実施内容

1-1. プロジェクトの達成目標

(1) 全体目標およびリサーチ・クエスト

○本提案では、少子高齢化などに起因するまちづくりの人材不足を背景に、重要伝統的建造物群保存地区である奈良県橿原市今井町において、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」をまちづくりのビジョンとして掲げる。そして、今井町に隣接する奈良県立医科大学（以下奈良医大）のナレッジとヒューマンリソースを活用し、「まちも元気に、ひとも元気に」をめざす社会実験の場を形成する。

奈良医大の機能とノウハウを今井町に埋め込んでいくことで、まちなか医療を核とした地域の健康基盤の実現をめざし（「ひとも元気に」）、その過程で町並みを整え、まちづくり人材を育むことで、内発的な景観まちづくりの素地を再強化する（「まちも元気に」）という、「ひと」と「まち」の健康を同時に向上させる好循環の仕組みを作り出すことをビジョンに掲げている。

○プロジェクトの達成目標としては以下の4点を掲げている

目標①：住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂

目標②：ICTを活用した独居等高齢者のための健康見守りシステムの開発

目標③：空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立

目標④：医大生まちづくり組織設立

○ビジョンの実現に向けて継続的なまちづくりをめざすなかで、以下の2つのリサーチクエスト（RQ）を設定している。

➡[RQ1] 多世代共創によってまちづくりに取り組む際に、ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに可視化しその程度を計量化することができるか？ またそれをもとに「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙的ノウハウの一般化」に活かすことができるか？

（→領域RQ7「世代共創の程度や多世代型ソーシャルキャピタルに関する指標」に対応）

➡[RQ2] 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画深化プロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？ 参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？

（→領域RQ2「若い世代の参加動機付け」、領域RQ3「参加の制度化」に対応）

(2) 平成30年度の目標

今年度の達成目標① 重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

今年度の達成目標② 「今井町アネックス」プロジェクト

今年度の達成目標③ 学生によるまちづくり推進体制の構築

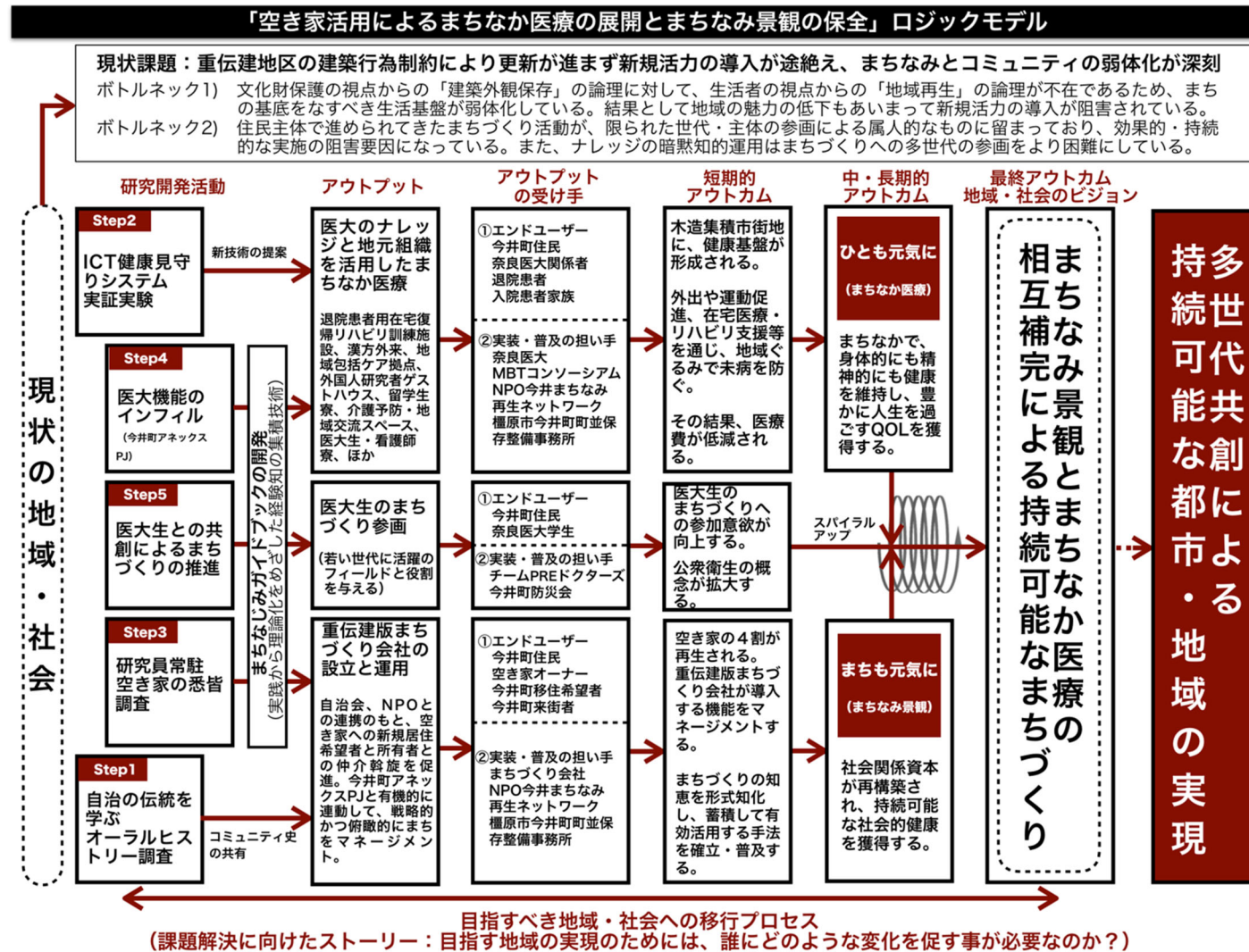
(3) 背景

○重要伝統的建造物群保存地区（重伝建）の制度設計のモデルとなった奈良県橿原市今井町は、住民の自治により長年町並み保存に取り組んできたが、近年以下のような課題を抱えている。

- ①町並み保存運動から約四半世紀が経過し、代替わりの時期を迎え人材不足に陥っている。
- ②住民の高齢化がすすみ、独居老人や身寄りのない高齢者が増加している。
- ③空き家の増加が著しく、町並み景観への影響が深刻化している。
- ④コミュニティの希薄化により、木造市街地の防災力の低下が懸念されている。

○こうした問題は全国的に見られる現象であるが、特に今井町は重伝建であるがゆえに、都市更新に対して多くの規制がかけられていることがボトルネックとなり、非常に深刻な状況にある。こうした状況に対して本提案は、「まちなみ景観とまちなか医療の相互補完による持続可能な重伝建保存」を今井町のビジョンとして掲げ、今井町を「まちも元気に、ひとも元気に」の実現をめざす社会実験の場とするものである。

1 - 2 . ロジックモデル



1-3. 実施方法・内容

(1) 実施項目の全体像

本プロジェクトの主眼は、(1) 多世代のための“医”の居場所づくりを核としたまちなか医療の展開および“縁”ネットワークの再構築（「ひとも元気に」）と、(2) まちなみ景観の保全・修復（「まちも元気に」）を、一体的に達成することにある。プロジェクトの全体像を図1に示す。本研究の実施項目は、大きく4つに分類され、それぞれがプロジェクトの達成目標①～④に対応している。

「住民自治の土台となるオーラルヒストリーの編纂（目標①）」は、地域特有の歴史・資源・課題を発掘し形式知化することを通して、まちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「ICTを活用した独居等高齢者のための健康見守りシステムの開発（目標②）」は、医大・医療従事者のまちなか医療への参画を通じて“医”の居場所づくりに寄与するほか、医大機能のまちなかへのインフィルを通じてまちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「空き家の適切な利活用促進のためのTMO設立（目標③）」は、住民主体の担い手組織を育むものであり、“縁”ネットワークを再構築しつつ“医”の居場所づくりを主体的に推進するほか、不動産利活用を中心としたエリアマネジメントを通してまちなみ景観の保全・修復に寄与する。

「医大生まちづくり組織設立（目標④）」は、医学生など若者層を中心とした「医・健康」「まちづくり」に対する潜在的参加意欲を刺激し、プロジェクトに巻き込んで、“医”の居場所づくりに寄与する。

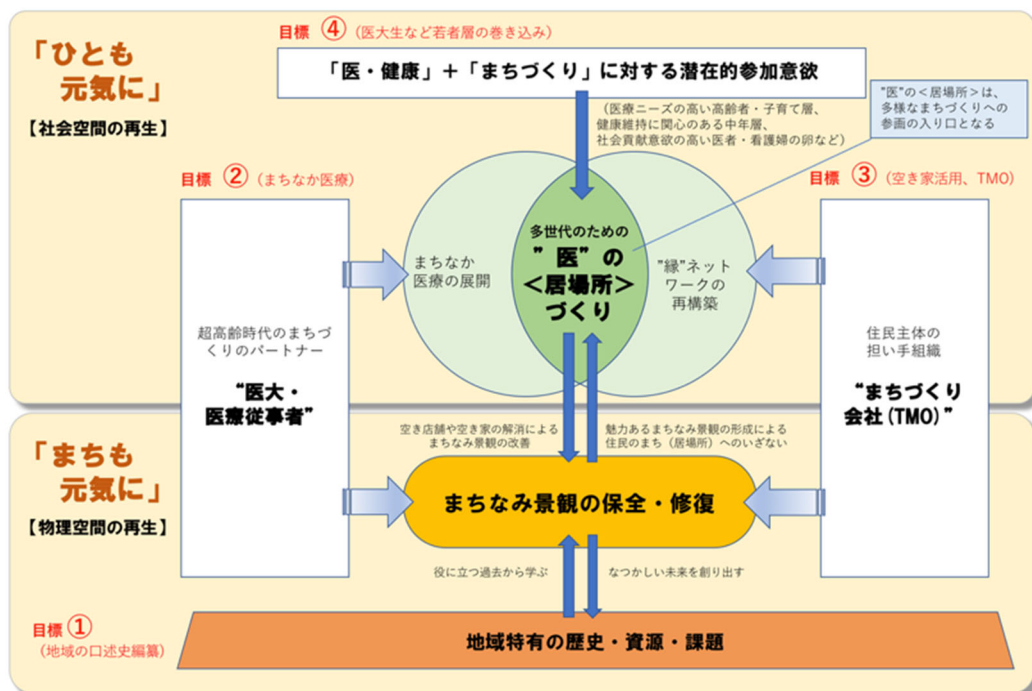


図1 プロジェクトの全体像

（２）各項目の実施内容

今年度の到達目標① 重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

実施項目③-1-2：重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

実施内容：

空き家への新規居住希望者とのマッチングや、所有者との仲介斡旋の促進などの役割を担い、重要伝統的建造物群保存地区内のプロパティを一元管理するTMO（Town Management Organization）として、「（一社）do-ma」をH30年6月に設立した。H30年度末時点で不動産仲介にコミットしている案件が12軒となった（図2）。重伝建版TMOでは、目に見える風景をテーマにすることによって、多世代の関心を集めることが可能であると考え、「共創の主題」として「まちなみ景観の保存修復」というテーマを扱うこととした。そして「共創の手法」として由緒ある町家を活用した学生シェアハウスをプロデュースすることとした。さらに「共創の仕組み」として設計・施工段階から、自治会といった地縁社会だけでなく、近隣の移住者や畿央大学の学生を巻き込み、協働で進めることとした。さらにその他、古材・古建具等のレスキュー&販売等、低未利用地を活用した現代版町家住宅の建設・企画を検討した。

（個人情報が含まれるため割愛）

赤塗り四角：仲介案件 青塗り四角：自主事業案件 青枠線四角：空き地・低未利用地活用案件

図2（一社）do-maコミット案件

また、新規住民が既存住民と人間関係を構築し、徐々に地域の運営への関与を深化させていく「まちなじみ」のプロセスを記述し、「まちなじみ」の効果的な展開パターンをまとめた『まちなじみガイドブック』を編纂・発行・公開した（図3）。さらにこの成果およびH28年度成果である「まちづくりオーラルヒストリー」の内容を基に、人生のなかで「まち」と関わる特徴的なシーンを取り上げ、さまざまな年代の当事者になったつもりで「まち」について考えるロールプレイ式ワークショップ「今井町まちづくり人生ゲーム」を開発し、住民向けに実施した（写真1、写真2）。また樫原市PTAが今井町内で実施したイベント内で「まちづくりオーラルヒストリー」の内容を活用して「昔遊び体験」ブースの出店および「クイズラリー」の企画を行った。



図3 公開した『今井町まちなじみガイドブック』



写真1 「今井町まちづくり人生ゲーム」の様子



写真2 同調査成果報告会の様子

今年度の到達目標② 「今井町アネックス」プロジェクト

実施項目③-2-1 今井町アネックスプロジェクトハード事業推進

実施内容：

空き家を活用してプロジェクトチームが利用している「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室」や、今井町内の空き家を活用して樫原市が整備・運営している「今井町町家館別館」において、“医”の居場所を開設した。また、新たなハード整備事業を進めるにあたり、地元NPOとの連携により、

空き家の実態整理、清掃活動、移住希望者に対する空き町家の見学ツアーを行なった（写真 3、写真 4）。



写真 3 空き家清掃



写真 4 町家見学

実施項目③-2-2 今井町アネックスプロジェクトソフト事業推進

実施内容：

“医”の居場所を拠点として、住民の健康習慣形成を支援した。具体的に、「早稲田大学 医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室」では、健康状態の測定や、近隣専門家を巻き込んだヨガ教室、健康相談などの健康プログラムの定期開催、さらには地域イベント「今井町着物でジャズ」での健康・医療ブース（健康相談会、健康茶の提供、アロマスプレー作り）の出店等を行った（写真 5、写真 6）。また「今井町町家館別館」では理学療法士によるストレッチ、体操と健康情報講座等を定期的に開催した。



写真 6 健康測定の様子



写真 5 土間ヨガ教室

実施項目③-2-1' 「多世代共創型まちづくり」海外先進事例（台湾）の調査分析

実施内容：

H29年度に実施した台湾の事例調査結果を参考に、多様なイベントの実施や、土間の拡張、自然光の取り入れ、健康状態測定器の設置といった今井町分室の空間・しつらえの改良を行った。さらに”医”の居場所に対する広域的調査を実施し、求められる機能や医療・福祉との連携事例の特徴把握を行った。

今年度の到達目標③ 学生によるまちづくり推進体制の構築

実施項目④-1 学生まちづくり組織設立

実施内容：

H28年度から実施している奈良県立医大の学生団体との連携によるまちづくり活動を本年度も実施した。またTMO〔（一社）do-ma〕が事業主体となって、町内にある由緒ある町家（空き家）を学生シェアハウスとする検討を開始し、それとともに現地でワークショップ（H31年3月）を実施した。（写真 7、エラー！参照元が見つかりません。）。



写真 7 畿央大学との現地ワークショップの様子



写真 1 畿央大学との現地ワークショップの様子

1 - 4. 研究開発結果・成果

（1）明らかになったこと

[RQ1] 多世代共創によってまちづくりに取り組む際に、ソーシャルキャピタルの成熟度をいかに可視化しその程度を計量化することができるか？ またそれをもとに「まちづくり知」をどのように蓄積し、「活動の継続と改善」「暗黙的ノウハウの一般化」に活かすことができるか？

回答：良い「まち」の条件として考えられる「まちなじみ」の多様度は、「まちなじみ」プロセス可視化の技術（H29年度開発）を応用することで計量可能である。また、自治の歴史やまちづくり活動に必要な情報など「まちづくり知」の蓄積にあたっては、「まち」をフィールドとした子育て家族向けイベントや、“医”の居場所の実施など、「まちなじみ」プロセスを創出することにより、世代を超えた新たな人間関係を構築することが可能である。

[RQ2] 多世代（特に若い世代）のまちづくり活動への参画深化プロセスと動機付けにはどのようなものがあるか？ 参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」とはどのようなものか？

回答：「まちなみ景観の保存修復」や「健康づくり」は多世代のまちづくり活動への参画を促す「共創の主題」となる。また“医”の居場所での健康測定器具設置および多様なイベント開催、近隣住民と居住を検討している人を巻き込んだシェアハウスの企画検討は、多世代のまちづくり活動への参画を深化・継続させる「まきこみプロセス」となる。

(2) 各項目の成果

今年度の到達目標① 重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

実施項目③-1-2：重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

学生シェアハウスの検討のために現地で実施したワークショップでは、地域活動への参加について、参加学生8名中5名が「地域住民と交流したい」と回答した。このことから、1-3 (2) で説明したような「共創の主題」「共創の手法」「共創の仕組み」が有効に機能している事が明らかとなった。

「まちなじみ」の概念については、まず「まちなじみ：Local Community Acquaintance」とは、地縁社会を介した、(A) 親しい間柄、(B) 親しい間柄のひとつと、(C) 親しい間柄になる相互行為」とであると定義することができた。また「より良い「まち」は多様な「まちなじみ」にあふれている。」という仮説を設定することができた(図4)。さらにその検証に求められる「まちなじみ」の多様性の計量は、H29年度に開発した「まちなじみ」プロセスの可視化の手法を応用することで可能となる事が明らかとなった。

「まちづくり人生ゲーム」では、地域課題に対する世代ごとの認識の違いや、世代を超えて有用な「共創の主題」が把握されるとともに、多世代のニーズを疑似体験することにより、自世代の利益を越えた視座を獲得できる事が明らかとなった。

【定義】「まちなじみ：Local Community Acquaintance」とは、
地縁社会を介した、
(A) 親しい間柄、(B) 親しい間柄のひとつと、(C) 親しい間柄になる相互行為 を意味する。

【仮説】 より良い「まち」は多様な「まちなじみ」にあふれている。

「良いまち」の定義： 誰も置き去りにしないまち。誰もが「知ることができるまち」であり、「参加することができるまち」であり、「自己実現することができるまち」であることが条件となる。そこでは、高齢者をはじめとした、すべての世代の孤立・孤独と、外国人をふくむ、新規居住者・参入者、社会的弱者の孤立・孤独が解消される。

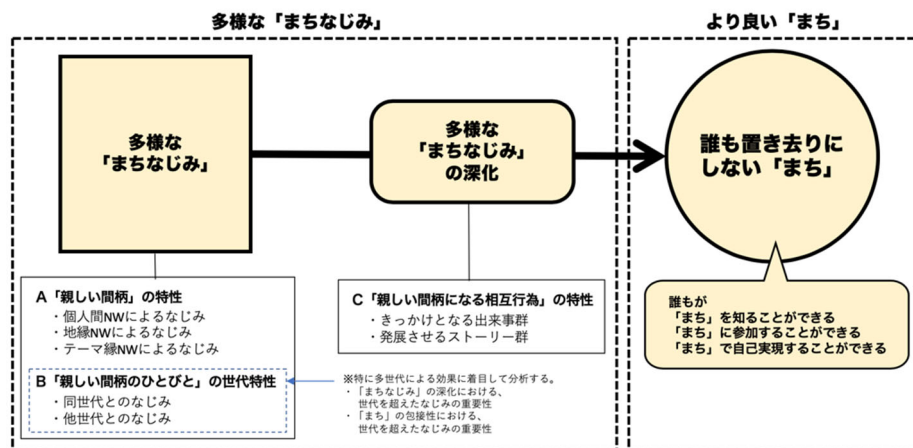


図4 「まちなじみ」の仮説検証方法

今年度の到達目標② 「今井町アネックス」プロジェクト

実施項目③-2-1 今井町アネックスプロジェクトハード事業推進

“医”の居場所づくりにともなうハード整備に対して、その前段階での空き家

の清掃活動が、オーナーと開設者の信頼関係構築を進めるため、円滑なハード整備に有効であることが明らかとなった。

また台湾の事例を参考にアップデートした空間・しつらえは、“医”の居場所への幅広い住民の来訪を促す装置として機能することが明らかとなった。具体的には、健康測定器具や、多用途に利用可能な土間の設置が有効であった。

実施項目③-2-2 今井町アネックスプロジェクトソフト事業推進

“医”の居場所においては、「健康」「食」「運動」「ストレスセラピー」など多様なテーマを取り扱うイベント企画により、中高齢者をはじめとする住民の健康習慣の形成に資する事が明らかとなった。またこのような利用しやすい場所の存在は、若者も含めてまちづくり活動に興味のある人・組織に活動拠点を提供することを通じて、そうした人々・組織を引き寄せ、“医”の居場所自体がまちづくり活動に興味のある人・組織間の情報共有の場、いわばネットワークの核になることが明らかとなった。さらにこうしたまちづくり活動に興味のある人・組織と健康増進に興味のある中高齢者が同じ施設を利用することで多世代共創を促すことが明らかとなった。

実施項目③-2-1' 「多世代共創型まちづくり」海外先進事例（台湾）の調査分析

全国の居場所づくりの取り組みの中で、福祉関連事業者との連携は多く見られるものの、医療関連事業者との連携は限定的であることが明らかとなった。また医療関連事業者と連携した“医”の居場所に求められる機能としては、健康相談、飲食、サークル活動が挙げられた。さらにそのような“医”の居場所は、医者が関与することで男性も含む中高齢者の来訪を促進していること、また福祉系の若者の活躍の場を提供し得ることが明らかとなった（エラー! 参照元が見つかりません。）。



写真 1 高齢男性の外出を促進する“医”の居場所の先進事例

今年度の到達目標③ 学生によるまちづくり推進体制の構築

実施項目④-1 学生まちづくり組織設立

若者によるまちづくり活動への参画に関して、特に医大生の場合には学業の負担が障壁となっていることが明らかとなった。また、医大生・地域住民ともに、連携の窓口やノウハウが不足していることも課題として挙げられた。

しかし一方で、“医”の居場所における、「健康づくり」をテーマとした活動へは、地域住民および医大生の理解が得られやすいことが明らかとなった。

また医大生に限らなければ、「まちなみ景観の保存修復」も学生の参画を促すテーマであることが明らかとなった。

（３）当該年度の成果の総括・次年度に向けた課題

今年度の達成目標① 重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立：計画通りTMOを設立した。さらに学生の「まちなじみ」をすすめるシェアハウス検討、空き家への新規居住希望者とのマッチングや所有者との仲介斡旋の促進等を実施した。今後は「まちなみ景観の保存修復」という「共創の主題」のもと、学生・移住者・近隣住民を巻き込んだ形での学生シェアハウス検討、またその他の町家・空き地活用を進め、「共創の手法」の実証を重ねると共に、適切な「共創の仕組み」像を精緻化していくことが求められる。

今年度の達成目標② 「今井町アネックス」プロジェクト：計画通り進捗している。ハードとしては、2つの”医”の居場所と「奈良県立医大ゲストハウス」が稼働し、また上記TMOによる学生シェアハウスを含む空き家活用も検討が進んだ。またソフトとしては、”医”の居場所を拠点とした住民の健康習慣形成を進めることができた。また「まちなじみ」概念の精緻化、世代に注目し多世代共創の主題・手法を顕にする「今井町まちづくり人生ゲーム」開発を行うことができた。今後は、「より良いまちは多様なまちなじみにあふれている」という、本研究を通して得られた仮説の検証が求められる。

今年度の達成目標③ 学生によるまちづくり推進体制の構築：一部計画変更はあるものの進捗している。具体的には医大生のまちづくりへの巻き込みについて、様々な試行しているものの、学業との両立などの点から医大生によるまちづくり活動の自立についてはめどが立っていない。一方、空き家を活用したシェアハウス検討については、対象学生の枠を他大学まで広げることで、学生の積極的な参加を得ることができた。今後は、医大生のまちづくり、他大も含めた学生シェアハウスの検討を進め、「共創の手法」の実証、「共創の仕組み」像の精緻化が求められる。

2. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

- 本年度設立した「（一社）do-ma」はH30年度末時点で不動産契約済み1軒、コミット中12軒の不動産仲介を進めた。
- H28年度のオーラルヒストリー調査成果は、橿原市の小学生およびその親を対象として橿原市PTAが主催した「今井まちなみ探検隊」内で活用した。具体的には、オーラルヒストリー調査から得られたまちの思い出をクイズとして出題し、また昔の遊びを地元の協力者とともに体験させるといったプログラムを実施した。
- H29年度のまちなじみ調査を元に「まちなじみガイドブック」を編纂・発行・公開した。
- H29年度までに実証実験を行ったICT健康見守りシステムは、実験場所が他地域に展開

し技術の一般化が進んだ。

3. 研究開発実施体制

(1) 重伝建版TMO設立グループ

- ①後藤春彦（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②重要伝統的建造物群保存地区版TMO設立

(2) 今井町アネックスPJ推進グループ

- ①細井裕司（奈良県立医科大学・理事長兼学長）
- ②今井町アネックスPJハード事業、今井町アネックスプロジェクトソフト事業推進、
「多世代共創型まちづくり」海外先進事例（台湾）の調査分析

(3) 学生まちづくり組織設立グループ

- ①森本章倫（早稲田大学大学院創造理工学研究科・教授）
- ②学生まちづくり組織設立

4. 研究開発実施者

重伝建版TMO設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	講師
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大学	工学部建築工学科	准教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
山田宮土理	ヤマダ ミドリ	近畿大学	建築学部	助教
岡村 竹史	オカムラ タケシ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	社会文化領域	講師
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手

高嶺 翔太	タカミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D4
森田 椋也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D3
AYA IBRAHIM	アヤ イブラヒム	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
下山 萌子	シモヤマ モエコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
許 達毓	キョ タツイク	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
李 蔚	リ ウエ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
浦田愛永	ウラタ マナエ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
北原遼大	キタハラ リョウタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
北村佳恋	キタムラ カレン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
齋藤拓人	サイトウ タクト	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
田嶋玲奈	タジマ レイナ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1

今井町アネックスPJ推進グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
細井 裕司	ホソイ ヒロシ	奈良県立医科大学	—	理事長兼学長
山村 崇	ヤマムラ シュウ	早稲田大学	創造理工学部建築学科	講師
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教
後藤 春彦	ゴトウ ハルヒコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
佐藤 宏亮	サトウ ヒロスケ	芝浦工業大学	工学部建築工学科	准教授
岡村 竹史	オカムラ タケシ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマサ	早稲田大学	社会文化領域	講師
林 書嫻	リン ショカン	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
高嶺 翔太	タカミネ ショウタ	早稲田大学	医学を基礎とするまちづくり研究所	研究助手
吉江 俊	ヨシエ シュン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D4
森田 棕也	モリタ リョウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D3
AYA IBRAHIM	アヤ イブラヒム	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	D1
リム ジョンミン	リム ジョンミン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
石綿 朋葉	イシワタ トモハ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
津島 英征	ツシマ ヒデユキ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
渋谷 健太	シブヤ ケンタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2

松本 慎	マツモト シン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
下山 萌子	シモヤマ モエコ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
鷹野 泰地	タカノ タイチ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
許 達毓	キョ タツイク	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
李 蔚	リ ウエ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M2
浦田愛永	ウラタ マナエ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
北原遼大	キタハラ リョウタ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
北村佳恋	キタムラ カレン	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
齋藤拓人	サイトウ タクト	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
田嶋玲奈	タジマ レイナ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
廣瀬耀也	ヒロセ ヨウヤ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
福井亮介	フクイ リョウスケ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
松田はるか	マツダ ハルカ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
松永幹生	マツナガ ミキオ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1
森菜穂美	モリ ナホミ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	M1

学生まちづくり組織設立グループ

氏名	フリガナ	所属機関	所属部署	役職 (身分)
森本 章倫	モリモト アキノリ	早稲田大学	大学院創造理工学研究科	教授
遊佐 敏彦	ユサ トシヒコ	奈良県立医科大学	産学官連携推進センター	助教

岡村 竹史	オカムラ タ ケシ	早稲田大学	医学を基礎とす るまちづくり研 究所	主任研究員
馬場 健誠	ババ キヨマ サ	早稲田大学	社会文化領域	講師
林 書嫻	リン ショカ ン	早稲田大学	医学を基礎とす るまちづくり研 究所	研究助手
高嶺 翔太	タカミネ シ ョウタ	早稲田大学	医学を基礎とす るまちづくり研 究所	研究助手
吉江 俊	ヨシエ シュ ン	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	D4
森田 棕也	モリタ リョ ウヤ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	D3
AYA IBRAHIM	アヤ イブラ ヒム	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	D1
リム ジョンミン	リム ジョン ミン	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
石綿 朋葉	イシワタ ト モハ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
本田 理沙	ホンダ リサ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
津島 英征	ツシマ ヒデ ユキ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
渋谷 健太	シブヤ ケン タ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
松本 慎	マツモト シ ン	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
下山 萌子	シモヤマ モ エコ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
鷹野 泰地	タカノ タイ チ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
許 達毓	キョ タツイ ク	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
李 蔚	リ ウエ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M2
浦田愛永	ウラタ マナ エ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
北原遼大	キタハラ リ ョウタ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1

北村佳恋	キタムラ カ レン	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
齋藤拓人	サイトウ タ クト	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
田嶋玲奈	タジマ レイ ナ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
廣瀬耀也	ヒロセ ヨウ ヤ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
福井亮介	フクイ リョ ウスケ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
松田はるか	マツダ ハル カ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
松永幹生	マツナガ ミ キオ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1
森菜穂美	モリ ナホミ	早稲田大学	大学院創造理工 学研究科	M1

5. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

5-1. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

(1) 情報発信・アウトリーチを目的として主催したイベント

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
H30/5/13	着物でジャズ「健康・医療ブース」	橿原市今井町称念寺および「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	市内外から大勢の来訪者があった。また奈良立医大生「東洋医学研究会」とコラボし、健康チェックなどの企画を実施した。	約 50 名
H30/8/24	今井土間ヨガ	「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	ヨガの講師を招き近隣住民と共にでヨガを実施した。	6 名
H30/10/25	今井土間ヨガ	「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	ヨガの講師を招き近隣住民と共にでヨガを実施した。	約 10 名
H30/10/28	今井健康カレー	奈良県立医科大学大学	奈良県立医科大学学園祭にて、早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所協力の下、地元事業者、学生団体の連携による「今井健康カレー」を提供した。	約 100 名
H30/11/4	着物でジャズ「健康・医療ブース」	橿原市今井町称念寺および「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	市内外から大勢の来訪者があった。また奈良立医大生「東洋医学研究会」とコラボし、健康チェックなどの企画を実施した。	約 50 名

(2) 研究開発の一環として実施したイベント

年月日	名 称	場 所	概要・反響など	参加人数
H30/7 月～	健康ステーション	「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	研究拠点を開放し、体組成計等を用いた町民の健康チェックを実施。毎週金曜日、計 33 回実施した。定期的に健康チェックに訪れるリピーターが生まれるなど、地域における健康への関心が高まりつつある。	のべ 167 人
H30/7 月～	健康教室	橿原市今井町 まちや館別館	今井町自治会と共催で実施。月 2 回、計 15 回実施。着座したままの健康体操、メタボや疲労度測定など実施した。	のべ 148 人
H30/11/11	昔遊び体験・クイズラリー@今井まちなみ探検隊	橿原市今井町並保存整備事務所および「早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所今井町分室」	橿原市の PTA 主催企画「今井まちなみ体験隊」企画に参加。後述し調査などの成果を活用した。	約 200 名
H31/1/27	今井町まちづくり人生ゲーム成果報告会	橿原市今井まちなみ交流センター「華薨」	町内の 44 名に協力頂いた「今井町まちづくり人生ゲーム」調査の成果報告会を行った。	43 名
H31/3/12	学生シェアハウス現地ワークショップ	橿原市今井町恒岡本町町家	畿央大学の学生を対象に、町家を見学してもらいながら、学生シェアハウスに改修する事業について意見交換を行った。「実際に住みたい」という学生が 3 名いた。	10 名

(3) 書籍・冊子等出版物、DVD等

- ・『今井町まちなみガイドブック』、早稲田大学医学を基礎とするまちづくり研究所、早稲田大学後藤春彦研究室、2019年1月、研究所HP上で公開すると共に近日中

の配布を予定している。

(4) ウェブメディアの開設・運営

- ・医学を基礎とするまちづくり研究所、<http://pi-mbt.wixsite.com/home>：多言語対応しており、アメリカ、台湾、オーストラリア、欧米諸国などからも閲覧がある。

2016年立ち上げ。H30年度は以下のブログ記事を発信した。

- ・「今井町 暮らしの記憶の口述史 ―受け継がれる多世代の思い出―」の公開 (April 13, 2018)
- ・今井町で開催された「KIMONO JAZZGL at IMAICHO 2018 spring」に出店しました (May 17, 2018)
- ・「今井町まちづくり人生ゲーム成果報告会」を開催しました (January 29, 2019)
- ・「社區交往”Way to Community”-International Workshop of Placeamking 2018-」に参加しました (March 19, 2019)
- ・「今井町まちなみガイドブック」を公開しました (March 19, 2019)
- ・医学を基礎とするまちづくり研究所FACEBOOK、
<https://www.facebook.com/PIMBT/>、2016年立ち上げ。
- ・医学を基礎とするまちづくり研究所 今井町分室FACEBOOK、
<https://www.facebook.com/PIMBTAnnex/?fref=ts>、2016年立ち上げ。

(5) 学会 (5-3.参照) 以外のシンポジウム等への招待講演実施等

- ・医学を基礎とするまちづくり連続国際ワークショップ「地域の健康を下支えするプランニング」(2018年12月15日、2019年1月12日および19日)にて、ドイツ、アメリカ、台湾の研究者らおよび一般の来訪者を含む参加者計75名に対して、後藤春彦、遊佐敏彦、山村崇、馬場健誠、高嶺翔太から研究活動の成果を発表した。

5-2. 論文発表

(1) 査読付き (0 件)

●国内誌 (0 件)

●国際誌 (0 件)

(2) 査読なし (1 件)

- ・林書嫻、高齢化した住宅団地における社会的包摂コミュニティ拠点「南機拌飯」、日本建築学会建築雑誌、2019年2月

5-3. 口頭発表 (国際学会発表及び主要な国内学会発表)

(1) 招待講演 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(2) 口頭発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

(3) ポスター発表 (国内会議 0 件、国際会議 0 件)

5－4. 新聞／TV報道・投稿、受賞等

(1) 新聞報道・投稿 (2 件)

- ・「IoTで高齢者見守り」、NHK奈良放送局、2018年5月18日
- ・「会社設立：IT活用、高齢者見守り 健康データ、ラインで家族に 県立医大研究教授が設立 橿原／奈良」毎日新聞地方版（奈良）、2018年10月2日

(2) 受賞 (0 件)

(3) その他 (0 件)

5－5. 知財出願

(1) 国内出願 (0 件)

(2) 海外出願 (0 件)